

## 〈伝受〉の力点描

川平ひとし

解題 浅田徹（お茶の水女子大学助教授）

ここに活字化するのには、シンポジウム「古今集―注釈から伝授へ―」における故・川平ひとし氏の最後の口頭発表である。このシンポジウムは、「古今集・新古今集の年」に全国で催されたイベントの一つとして平成十七年八月八日に郡上市（旧・大和町）大和生涯学習センターで行われたものである。宗祇に古今集を伝授した東常縁の居館跡を中心に設計された「古今伝授の里フィールドミュージアム」での資料展示と併せ、全国から聴衆を集めて行われた。コーディネーターは島津忠夫氏、パネリストは川平氏のほか鈴木元氏、海野圭介氏であった。また、

シンポジウムに先立ち、片桐洋一氏による講演も行われた。イベントの裏方を務めていた関係で、川平氏には依頼の時点からお世話になった。

川平氏は発表ご承諾後に体調を崩され、当該年度には大学を休職、引き受けておられた学外の仕事もすべてキャンセルなされていた。しかしその中で、このシンポジウムだけは強い意志で準備を進められた。大きな病院もない郡上まで、八月の暑さの中を長い旅行でお出で頂くのは当方も極めて不安であった。お体を心配して何度かキャンセルをお勧めしたにも関わらず「必ず出ます」と繰返し決意を語られた。川平氏は介護用の器具を装着した特別のハイヤーで到着、病気のため憔悴してはおられたが、全くいつもと変らぬ明晰で自在な話し振りだった。質

疑に入っても、自由な問題の展開でむしろその場を領導してゆかれるほどであった。だが、それが川平氏が公の場に姿を見せた最後の日になったのである。

今回、ここに当日の氏の報告が掲載されるのは大変喜ばしいことである。実は、当日のために氏が作成された整った完全原稿が川平家に保管されていた。それをご子息の夏也氏がパソコンに入力されたものがここに掲げるものである。

細かく言うと、川平氏は基本になる原稿と、発表時間に合わせて細部をいくらかカットして書き直した原稿の両方を遺された（コピーを拝見したが、平生と変らぬ闊達な手書き稿である）。夏也氏が両方の異同を書き込んだ詳細なデータを下さったので、神野藤昭夫先生からのご依頼で浅田が体裁を整えさせて頂いた。

当日の配布資料には、原稿では言及されない図版や参考文献の掲出などがあったが、直接言及されていないものはここに取り込むことはしなかった。当日の録音資料（御家族が録音なさったもの）も遺されているが、比較すると時間の関係でかなりカットしてお話しになったことが知られる。ここでは、当日の

発表に関わらず、原稿を優先した。当日アドリブ的に加えられた発言については、ごく一部を浅田が取り込むにとどめた。見出しは原稿にはないが、発表資料の中の見出しに合せ、さらに浅田の考えで「Ⅲ」部分を三つに分割している。文中に傍線を付した部分の多くは、原稿に鉛筆で付された傍線で、口頭ではややゆっくり、強調して語られている。「伝受」の「受」の字は氏が意図的に選ばれたものであることを付言する。

内容は川平氏らしい意欲的でユニークなもので、決して既発表のものとの転用などではない。ただし、定家については氏のいくつかの論文が思い起こされる。また宗訊については（発表資料中にも挙げられていたが）『宗訊不審抄』（尊経閣文庫蔵）の本文と位置―『千種抄』への一経路―（『徳江元正退職記念録 倉室町文學論纂』二〇〇二年、三弥井書店）に詳論がある。

なお、当日は発表のまとめの部分が、時間の関係でカットされざるを得なかったが、乾安代氏の質問に答える形で補足なされた。他の質疑の中で発言では、井上宗雄氏の質問に答えて、室町期の古今集講釈が江戸期とは違った「演説」性（堯恵の講

釈などについてそう述べられている資料がある)を持っていた可能性がある(パフォーマンス性と言えばよいか)とのコメントがあった。また、伝授を歴史的系譜としてだけ迎えるのではなく、それぞれの時代の「輪切りの」知のあり方の中で理解する必要があることにも注意された。小瀬洋喜氏の質問に対しては、「伝える」ということが「価値の共有」に根ざしていたこと、現代では

そのような共有的価値が失われていることについて話された。

Ⅲ―2で取り上げられた宗祇ほかの伝授状については、その真正性にいくつか疑問がある(紙継の不審、BとCとが同筆に見えることなど)ことを指摘なさった。司会の島津氏、聴衆として来場された藤本孝一氏などのコメントが続いて話は盛り上がったが、詳しく採録することは避ける。

川平です。お手許の資料と併せて、お聞き下さい。

発表の題を、「〈伝受〉の力点描」としました。〈伝受〉を支えている〈力〉とは何なのか。それが、ここで考えてみたい問いです。この問いを、いくつかのポイントを追って、「点描」してみたいと思います。

## I 狭義・広義の〈古今伝受〉

〈古今伝受〉には狭い意味と広い意味との両面あると思います。言うまでもなく、狭い意味の〈古今伝受〉は、我らが東常縁が、連歌師・宗祇に授けたことに始まります。

この狭義の〈古今伝受〉という次元とともに、広い意味のそれがあるはずです。すなわち、古今集というテキストの解釈を、伝え、受ける、という行為、広義の〈古今伝受〉です。

狭義の〈古今伝受〉について少し言いますと、資料の①は、